

国語

(地理歴史・公民、数学は別冊子(R)になります)

令和四年度入学試験問題

受験上の注意

- 一、監督の指示により解答用紙に受験番号(算用数字)、氏名、フリガナを記入し、受験番号および該当する試験日をマークしてください。記入については解答用紙の注意事項に従ってください。
- 二、問題冊子の解答番号と解答用紙の番号を間違えないように注意してください。
- 三、国語の問題は、二～十七ページにあります。試験開始の合図があったら、まずページ数を確認してください。
- 四、試験時間中は、受験票を机上の受験番号の下に呈示しておいてください。
- 五、質問、その他用件があるときは、手を上げて合図してください。
- 六、試験時間中の退場は認めません。
- 七、試験時間は国語と地理歴史・公民、または国語と数学で八十分です。
- 八、この問題冊子は持ち帰ってください。

開始の合図があるまで開かないでください

一 「本文Ⅰ」「本文Ⅱ」を読み、後の問に答えなさい。

〔本文Ⅰ〕

パフォーマンスの向上・上達や試合内容の質よりも勝利や個人の名声が優先される構造は、アマチュアの世界でもみられます。

一九九二年の夏、全国高校野球選手権大会、明德義塾高校と星稜高校の試合で、明德義塾高校の投手は、星稜高校の四番打者・松井秀喜選手を五打席連続敬遠(注)しました。この五打席連続敬遠は、全国でいろいろな反響を呼びました。明德義塾高校の采配を支持するものから批判するものまでさまざまでした。この采配への批判の声が勝利至上主義の歯止めとならなかったのは、日本社会全体がスポーツにおける勝利至上主義を容認していたからといえるのかもしれませんが。明德義塾の監督自身、この敬遠策を勝つために当然のことと考えていたようです。この件以降、高校野球は、勝利至上主義的な傾向をますます強めています。

いったい勝利至上主義という暴走列車を止める「ブレーキ」とは何でしょうか。教育の一環として的高校野球は、結果よりも過程を重視すべきだと声を大にして主張することでしょうか。あるいは、日本人は武士道の精神を思い出すべきだと精神主義を強調することでしょうか。

私たちはこれまで、勝利至上主義への歯止めを教育や精神主義などの、スポーツとは別のものに求めてきました。教育そのものの既成概念が崩れようとしている今、勝利至上主義の「ブレーキ」を、スポーツの「外」に依拠せず、スポーツそのもののなかに見いださなければなりません。

⁽²⁾ したり顔で結果よりも過程を重視すべきだとか、勝利に対する皮相な禁欲主義を主張することはやめましょう。競争の結果としての勝敗を安易に否定したり、軽視してはいけません。勝敗は競技者同士が互いに持てる最高の力を出しあつた結果の産物ですから。だからこのように考えれば、プロ・アマを問わず、卓越性の追求よりも勝利を優先することや競技者が最善をつくしていないプレイは、決してよいプレイではなく、当然、敬遠もよいプレイではないといえると思います。

〔友添秀則・近藤良享「スポーツ倫理を問う」問題作成上、一部を改変した〕

〔本文Ⅱ〕

ある人は、身体的卓越こそが競技者が目指すべき目的であり、勝利なんてその卓越性を追求する過程でたまたま獲得できたりできなかつたりするものにすぎないんだ、だから勝利を第一義的に追求する方が本末転倒なんだ、そんなことをするから、基本的な技能を身につけずに小手先だけで勝とうとする輩やからのさばるんだと言います。

ここで主に検討するのは、この種の議論です。これを卓越性理論と名づけることにします。卓越性理論によれば、松井選手の五連続敬遠などという戦術は、「パフォーマンスの向上・上達や試合内容の質よりも勝利や個人の名声を優先する」「勝利至上主義」だと批判されます。卓越性理論が、他の数多あまたの勝利至上主義批判よりも傾聴に値するのは、それが「勝利至上主義の「ブレイキ」を、スポーツの「外」に依拠せず、スポーツそのもののなかに見いだそう」としているからです。スポーツの外から安易にスポーツを批判するのではなく、スポーツの内側うちに勝利至上主義を克服する原理、「新たなスポーツパーソンシップ」を見出そうとする点に、卓越性理論の独自性があります。

卓越性理論は自らの理論的根拠を、試合やゲームの本質に求めます。試合の本質とは「A」という点にあると言われます。そう考えると、相互の卓越性の追求を否定し、互いのパフォーマンスの向上・上達と関わりのない行為をよくないプレイ・戦術とすべきだということになります。例えば野球の故意四球（敬遠）は確かにルール違反ではないけれども、野球本来の打撃技能での卓越性の追求における勝負を放棄しているという点で、スポーツパーソンシップに反する卑怯ひきょうな戦術だということになります。

どうでしょうか。ふんふん、なるほど、とつい納得してしまいそうですね。でも、何か違和感が残りませんか。

（中略）

卓越性理論の決定的なまちがいは、スポーツにおいて競われる卓越性が、試合の勝敗と別のところで成立しようと見なしているところだ。言い換えれば、Bと見なしているところだ。C、勝利とはすなわち、相手よりも卓越したという結果

ですから、勝利を求めることは卓越性を追求することと同義です。D、スポーツでは、勝った方が卓越していた、強かった

（負けた方が弱かった）ということになります。そう見なす以外にありません。⁽³⁾ほんとうは強かったけれども負けたということは、

ありえないのです。

これは、私たちの直感に大いに反しているように見えます。私たちはしばしば「実力では勝っていたのに負けた」というふうなことを言いますし、言いたくなります。この点はとても大事ですから、落ち着いてよく考えてみる必要があります。

そもそもスポーツの試合とは、どちらの身体能力が優れているか、どちらが卓越しているかを決めるために行なわれます。競われる卓越性の内容は競技によって異なります。野球やサッカーであれば得点能力（相手の得点を防ぐ能力）ですし、ボクシングであれば相手に的確に強くパンチを当ててダメージを与える能力（相手のパンチを防ぐ能力）です。したがってそれらの能力の高い方が勝ちますし、低い方が負けます。その能力の高さが卓越性なのですから、勝った方が卓越性が高く、負けた方が低いということになります。それ以外の解釈はありえません。

卓越性とは、平たく言えば、強さということですが、「強い」という言葉は、卓越性を示す総称的な言葉です。スポーツの試合は、もつとも分かりやすく言うと、「どっちが強い（弱い）か、誰が強い（弱い）か」を決めるために行なわれるのです。

（川谷茂樹『スポーツ倫理学講義』問題作成上、一部を改変した）

（注）敬遠 正式には「故意四球」と呼ばれる。野球において、強打者との勝負を避けることでその試合を勝利に導こうとする戦術。本文における

例では、星稜高校の松井秀喜選手は敬遠されたため、この試合で一度も投手と勝負することができなかった

問一 傍線部分(1)「勝利至上主義の「ブレイキ」を、スポーツの「外」に依拠せず、スポーツそのものなかに見いださなければなりません」とあるが、「スポーツの「外」に依拠せず、スポーツそのものなかに見いだす」とはどういうことか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① スポーツだけに限らない一般的な考え方をもとにするのではなく、スポーツのあり方に基づいて考えるということ
② 勝利することの価値を賞金や名声といったことに置くのではなく、よい試合を行なったこと自体に喜びを見いだすということ
こと

- ③ 試合の外での選手の行動を問題にするのではなく、試合における選手の行動こそを問題にするということ
④ スポーツのことをよく知らない人たちの意見にまどわされるのではなく、スポーツをしている内部の人たちの意見に従うということ

- ⑤ これまでの精神主義に偏重した教育に頼るのではなく、スポーツを取り入れた新たな教育を目指すということ

問二 傍線部分(2)「したり顔で結果よりも過程を重視すべきだとか、勝利に対する皮相な禁欲主義を主張することはやめましょう」のように言われる理由は何か。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 偉そうな態度で口先だけの主張をしても効果はないから
② 過程よりも結果を重視するのは当然のことだから
③ スポーツ選手に禁欲主義を押しつけてもむだだから
④ 卓越性を追求した結果として得られる勝利まで否定する必要はないから
⑤ 理由も示さずに勝利至上主義はいけないと言っただけでは説得力がないから

問三

空欄 A に入る表現として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 礼儀を重んじ戦う相手に対して十分な敬意を払う
- ② 最善をつくして相手よりも優れていることを示す
- ③ ルールを厳格に守って勝利を目指す
- ④ 第一義的に勝利を追求する
- ⑤ 勝負にこだわらず互いに人格を高めあう

問四

空欄 B に入る表現として、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 卓越していなければ勝利することなどできはしない
- ② 卓越性を追求することなくして勝利を追求することが可能だ
- ③ 勝とうという意識が強いと力が発揮できなくなる
- ④ 卓越性は必然的に勝利をもたらすはずだ
- ⑤ 真に卓越した人は勝利を求めたりはしないものだ

問五

空欄 C、D に入る語の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① C しかも D つまり
- ② C ただし D また
- ③ C しかし D したがって
- ④ C もちろん D しかし
- ⑤ C あるいは D にもかかわらず

問六 傍線部分(3)「ほんとうは強かったけれども負けたということは、ありえないのです」のように言われる理由は何か。最も

適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 6。

- ① 公正な勝負では偶然が介入する余地がないから
- ② 「強かったけれども負けた」は負け惜しみにすぎないから
- ③ 真に強い人が敗れることはめつたに起こらないから
- ④ 勝利することがすなわち「強い」ということの意味だから
- ⑤ 強い人は勝利するまでけつして諦めないから

問七 卓越性理論が勝利至上主義を批判する理由は何か。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 7。

- ① 勝利を目指す努力にこそ価値があり、勝利そのものに価値はないから
- ② 勝てばよいという考え方は相手に最善を尽くさせないという考えにつながるから
- ③ 勝ち負けにこだわるとスポーツを楽しむことができないから
- ④ 勝利に固執するとルール違反を犯しても勝とうとするようになるから
- ⑤ スポーツ選手はわれわれの手本になるような人間であるべきだから

問八

「本文Ⅱ」の筆者の考えに合致するものとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は

8

。

- ① 卓越性を追求するのであればなるべく相手に力を発揮させないようにすべきである
- ② 相手にも実力を発揮させた上で真に強い者を決めるべきである
- ③ 卓越性の追求だけでは勝利を手にすることはできない
- ④ スポーツは最後は自分自身との戦いである
- ⑤ たとえ勝負に敗れても全力をつくしていい試合ができれば満足できる

この頁は白紙です

二 「本文Ⅰ」を読み、後の問に答えなさい。

「本文Ⅰ」

私たちは、自分の口も他人の口も、同じ「口」に他ならないと考えている。しかし、考えてみれば不思議ではないか。他人の口は正面から見ることができるが、自分自身の口はほんの一部しか見ることができない。また、その機能も根本的に異なっている。他人の口にくら食べ物が入ったところで、私たちは自分たちの空腹を癒すことができない。なのに、なぜ子どもたちは、自分の口が他者の口と同じ「口」だと理解できるようになるのか。これは他者と同型的な身体図式がいかに獲得されるのかという問題でもある。従来は、このような問題は、単に子どもが、大人が口を開けたのをいつ模倣できるのかという単純な問いに還元されていた。これに対して、私は、この問題を「食べさせる」というコミュニケーション行為の問題としてとらえる、という新しい視点を提案したのである。子どもは、いつ頃から他者に食べさせるようになるのだろうか。また他者が食べていると欲しがるようになるのだろうか。また、食べ物了他者に差し出すことは、子どもにとってどのような意味があるのだろうか。このような事柄を丹念に研究⁽³⁾することが、子どもの「口」の概念の獲得過程を明らかにすることだと考えたわけである。このような視点で、長男Uの日誌的データをまとめたのが、次の表である。

表 生後1年目における乳児Uの〈食べさせる〉というコミュニケーション行為の発達

	期 間	ま と め
第Ⅰ期	7 か月 23 日 より	誘導された〈食べさせる行為〉の発生： <input type="text" value="A"/> 。人に飲ませると いう行為が初めて観察されたものの定着せず。
第Ⅱ期	8 か月 20 日頃 より	自発的な〈食べさせる行為〉の成立：手にしているものを他者の口に差し 出すスキルを完全に習得する。Uと父親がUのイニシャティブで交互に哺乳 瓶の果汁を飲むといった新しいタイプのやり取りが初めて観察される。
第Ⅲ期	10 か月 2 日頃 より	〈食べさせる行為〉の社会的研究：実際に相手に食べさせるのが目的では なく、相手に食べる真似をさせたり、相手をからかうのが目的になる。 <input type="text" value="B"/> 。
第Ⅳ期	10 か月 30 日頃 より	〈人に食べさせる〉というコミュニケーション行為の成立：食べる真似を 人にさせたり、人をからかい意地悪をしたりするために食べ物を出し出す ことがほとんどなくなる。人に食べさせることが、その人との関係に影響 を与えるコミュニケーション行為として機能し始める。対人的緊張を緩和 させたり、挨拶のためであるかのように来客に食べ物を出し出すようになる。
第Ⅴ期	11 か月 19 日 より	〈食べさせる〉ふりの成立： <input type="text" value="C"/> 。絵本の食べ物の写真を描む 真似をし自分の口に持って行き食べる真似をする。

この表を見ると、生後七か月後半に「誘導された〈食べさせる行為〉」が発生し、次に生後八か月後半から「自発的な〈食べさせる行為〉」が成立し、生後十か月初め頃より「〈食べさせる行為〉」の社会的研究」が始まり、生後十か月の終わりから「コミュニケーション行為としての〈食べさせる行為〉」が出現することが分かる。同じ食べ物を分かち合って食べ、互いのコミュニケーションを図るといのは、チンパンジーにも見られないヒト特有の行動である。長男のUは、生後十か月三十日よりそのような段階に突入している。この日、Uは菓子を私（父親）に差し出し、かじらせ、また自分もそれをかじるといった交互パターンをかなり長く続け、「共食」というヒト特有の文化を自分のイニシヤティブで演じて見せたのである。生後十一か月半ばからは、人形に食べさせるふりをしたり、絵本の食べ物を食べるふりをしたり、さまざまに「〈食べさせる〉ふり」が可能になっている。この段階になると、Uが自己の〈口〉と他者の〈口〉との同型性を認識していることはほぼ確実であるように思われる。ここでの議論をさらに発展させ、自己と他者との同型性の認識の問題をコミュニケーション発達との関連で論じたのが拙著『身ぶりからことばへ』である。機会があれば読んでいただきたい。

（麻生武「私たちの起源」問題作成上、一部を改変した）

（注）イニシヤティブ 主導権。イニシアチブ

問一 傍線部分(1)「〈口〉」とあるが、「本文I」では〈 〉の括弧を使わない「口」と〈 〉の括弧を使った「〈口〉」という表記がどのように使い分けられているか。その説明として最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 9。

- ① 「口」は目で視覚的に認識されるものとしての口を表すのに対し、「〈口〉」は他の感覚器官で知覚される口を表す
- ② 「口」は個別具体的な口を表すのに対し、「〈口〉」は自分と他人の口の共通点を抽象化して認められる概念的な口を表す
- ③ 「口」は身体的な実体としての口を表すのに対し、「〈口〉」は身体的な実体と無関係な想像上の口を表す
- ④ 「口」は本人のみがその存在を認識できるものとしての口を表すのに対し、「〈口〉」は誰にも認識可能な口を表す
- ⑤ 「口」は他者との相違点を超えて認識される口を表すのに対し、「〈口〉」は個人に固有のものとして認識される口を表す

問二 傍線部分(2)「その機能も根本的に異なっている」とあるが、どのような点で異なっていると言えるか。その説明として最も適切なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 他人の口は、自分の口と同型的な身体図式を持ちえないものである点で、自分の口と異なっている
- ② 他人の口は、食べ物が入ってもその口の持ち主の空腹を満たさない点で、自分の口と異なっている
- ③ 他人の口は、鏡を使わなくとも正面から全体を観察可能だという点で、自分の口と異なっている
- ④ 他人の口は、その人の身体とつながっていて自分の身体とはつながっていないという点で、自分の口と異なっている
- ⑤ 他人の口は、「食べさせる」というコミュニケーション行為に関与しない点で、自分の口と異なっている

問三 傍線部分(3)「研究」とあるが、この研究はどのような点でこれまでにない独自性を持つと言えるか。その説明として最も適切なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 。

- ① 〈口〉の概念の獲得過程を自身の子どもの観察から明らかにしようと考えた点
- ② 〈口〉の概念を獲得するには同型性の獲得が必要だと考えた点
- ③ 〈口〉の概念の獲得は大人の真似からはじまると考えた点
- ④ 〈口〉の概念が他者との相互のやりとりを通じて獲得されると考えた点
- ⑤ 〈口〉の概念は「食べる」という経験を重ねることにより獲得されると考えた点

問四

表の空欄 A、B、C に入る乳児 U の観察記録として、最も適当なものをそれぞれ一つ選び、マークしなさい。なお、この

表では液体を飲ませることも〈食べさせる行為〉として記録されている。解答番号は A 、B 、C 。

- ① 空腹であるはずなのに、食べ物を差し出すとわざと食べたくないふりをする
- ② 周囲の人間が物を飲んだり食べたらしようとするとときに邪魔をする
- ③ 相手に食べさせてそれをじっと観察したり、相手が食べようとするとわざと手を引っ込め自分で食べ嬉し^{うれ}そうにしたりする

- ④ 父親がミルクを飲むように働きかけると、それを待っていたかのように飲み始める
- ⑤ 母親が口を開けて催促すると手にしていた哺乳瓶の乳首を母の口に入れる
- ⑥ ぬいぐるみの人形に洗濯ばさみを差し出し、パッパッと口を鳴らし人形に食べさせるふりをする
- ⑦ 目の前のお菓子を食べたそうにしているが、父親が食べ始めるまでは自分も食べるのを我慢する

問五

傍線部分(4)「共食」と〈口〉の概念の獲得はどのように関わっているか。その説明として最も適当なものを一つ選び、

マークしなさい。解答番号は 。

- ① 共食を通じて物を口に入れて食べる方法を身につけることで〈口〉の概念が獲得される
- ② 共食を通じて〈食べさせる行為〉がヒト特有の行動だと気づくことで〈口〉の概念が獲得される
- ③ 共食を通じて自分も周囲の人間に食べ物を分け与えられることを知ることで〈口〉の概念が獲得される
- ④ 共食を通じて他者との精神的なつながりを確認することで〈口〉の概念が獲得される
- ⑤ 共食を通じて自己と他者の食べる行為の共通性を理解することで〈口〉の概念が獲得される

次に示す「本文Ⅱ」は「本文Ⅰ」の末尾で示された本の一節である。これを読み、後の問に答えなさい。

〔本文Ⅱ〕

「個体の知覚」とは、その有機体の個体メカニズムに完全に還元できるような知覚であり、共同化された知覚とは、その成立がなんらかの意味で他の個体に媒介されており、その有機体の個体メカニズムに全面的に還元するわけにはいかないような知覚である。簡単に言えば、両者の違いは他の個体の存在を前提にしているか否かにあると言える。「共同化された知覚」が他の個体の存在を前提にしているというのは、次の二つの意味においてである。一つは、その場合、有機体は「何」を「どのように」知覚するのかということ⁽⁵⁾を他の個体との関係を通じて学ぶという意味である。もう一つは、その有機体は知覚体験を他の個体と分かち合うことができるという意味である。つまり、彼は自分が知覚している対象世界を他者もまた知覚しうるし、また逆に、他者が知覚している対象世界を自己が知覚することも可能であると知っているという意味である。

それでは、そのような「共同化された知覚世界」を他の個体と分かちあっているような個体とは、いったいどのような個体なのだろうか。「共同化された知覚世界」をもつことのできる個体とは、他の個体から何かを学び、その学んだものを他の個体と分かち合うような個体である。トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠^{ねずみ}は、他の個体とそのような関係をもつことができない。しかし、私たちはそれができる。私たちは、自分たちの知覚している世界が、他者にもまた同様に開かれており、その世界の中で生じるさまざまな事象を他者と分かち合うことができると考えている。また、自己に体験できることは、基本的に他者にも体験できると考えている。私たちとトンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠との相違は、次のように言うこともできる。私たちは、自己と他者とを基本的に同型的な存在であり、自己と他者とは共通世界をもっており、自己の世界に対する関係と他者の世界に対する関係とは基本的に同じであると考えている。自己と他者とをこのように組織化していることが私たちの特徴であり、そのことが「共同化された知覚世界」を可能にしているのだと考えられる。これに対して、トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠は、そのように自己と他者とを組織化していない。彼らには、「共同化された知覚世界」を可能にするような、自己と他者についての認識が存在していないと言えよ

う。かくして、かれらは、共同化された知覚世界、をもちえないのである。

結局、共同化された知覚世界、をもつことができるのは、共同化された知覚世界、を挟んで成立するような、自己、と、他者、を創り出しうる存在であるということになる。これは、「Aをもつことができるのは、AをもつことができるBである」と語っているに等しい。それはトートロジーである。⁽⁷⁾ 、⁽⁸⁾ 言って、述べてきたことが無意味だというわけではない。

このトートロジーは、共同化された世界、と、自己、と、他者、という三つの項が、互いに独立ではなく依存しあった概念であることを物語っているのである。共同化された知覚世界、というタームは、^(注3) 世界を共有し合うような関係性にある二つの項、つまり共通世界を軸に^(注4) シンメトリーな構造をもつ二つの項として自己と他者とを組織化できる者の存在を前提にしている。そのように自己と他者とを組織化した者が存在しないことには、共同化された知覚世界、は成立しようにも成立することができない。逆に、自己と他者とは基本的に同じようなものであり他者もまた自己と同様な知覚世界をもちうるのだというように、自己、と、他者、とを組織化できた者が存在するならば、当然の帰結として、⁽⁹⁾ 共同化された知覚世界、が成立しうることになる。

(麻生武『身ぶりからことばへ』問題作成上、一部を改変した)

(注1) 有機体 生物

(注2) トートロジー 同じ言葉の繰り返し

(注3) ターム 用語

(注4) シンメトリーな 対称的な

問六 傍線部分(5)「他の個体」とあるが、「本文Ⅰ」の乳児Uの場合、「他の個体」にあたるものはどれか。最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 16。

- ① チンパンジー
- ② 乳児U自身
- ③ 「本文Ⅰ」の筆者
- ④ 他者の〈口〉
- ⑤ 絵本の食べ物

問七 傍線部分(6)「知覚体験を他の個体と分かち合うことができる」とあるが、「本文Ⅰ」の事例の場合、それは具体的にどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 17。

- ① 食べる動作に伴う経験を自己も他者も基本的に同質のものとして捉えていると理解できる
- ② 食べ物は自己が占有するだけでなく他者と分け合うべきものだという感覚が理解できる
- ③ 食べさせ合う行為によって自己と他者との間に友好的な気持ちが生じることを理解できる
- ④ 食べ物についての知覚を自己と他者が言葉で伝え合えることを理解できる
- ⑤ 食べさせる行為を通じて自己も他者も〈口〉の概念を体得したということを理解できる

問八 空欄(7)、(8)に入る語の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選び、マークしなさい。解答番号は 18。

- ① (7) なぜなら (8) 控えめに
- ② (7) なるほど (8) なぜと
- ③ (7) そこで (8) 平たく
- ④ (7) つまり (8) 端的に
- ⑤ (7) しかし (8) だからと

問九 傍線部分(9)「共同化された知覚世界」に関する説明として、「本文Ⅰ」「本文Ⅱ」の内容に合致するものを三つ選び、

マークしなさい。解答番号は 19 (解答欄一行に三つマークすること)。

- ① 他の個体と関係をもつことがない限り、人間は「共同化された知覚世界」を身につけることができない
- ② 自己と他者という概念は「共同化された知覚世界」に依存して存在するものであり、共通世界があることを前提に生じる
- ③ 「共同化された知覚世界」は、自己と他者を同型的な存在だと認識しない有機体にとっては成立しないものである
- ④ 「個体の知覚」は「共同化された知覚世界」によって他の個体の知覚と関係づけられることで作り出される
- ⑤ 人間の赤ん坊が「共同化された知覚世界」を作り上げようとする相手は、昆虫や動物ではなく人間に限られる
- ⑥ 人間は「個体の知覚」を徐々に手放すことで「共同化された知覚世界」を他者との間に構築するようになる
- ⑦ 自己と「共同化された知覚世界」の間にある関係は、他者と「共同化された知覚世界」の間にある関係と基本的に同じである

この頁は白紙です

この頁は白紙です